

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月12日発行「補習校だより」第13号より抜粋

漢字を適正に使う。

- ・漢語（漢字を音で読む言葉）は交ぜ書きしない。「連らく」など。
- ・平仮名で書く言葉は漢字で書かない。「……の様だ」など。

「音読み」というのは「原音読み」の略であり、「訓読み」というのはその語の意味をとるということです。「机」を例にとると、英語の音は「デスク」、中国語の音は「キ」、訓（＝意味）はどちらも「つくえ」です。

「キ」という音だけ示されたら、「危・気・記・器・期・旗・機・既・季・亀・鬼・騎」のどれなのかわかりません。「キンキジャクヤク」「ガデンインスイ」など、耳で聞いただけではおまじないも同然です。それがわかるのは、「欣喜雀躍」「我田引水」という漢字を充てながら聞くからです。

つまり、漢語を仮名書きするのは、発音記号で書くようなものであって、漢字で書かなければ漢語はその言葉にならないのです。

ところが、日本の学校では、「習っていない漢字は使わない」と、漢語を交ぜ書きすることが普通に行われています。背景にあるのは、「子どもには漢字は難しく、それを課するのは可哀想」という思いこみです。

その実態を「牛乳」という漢語の場合で見してみましょう。海外の子ども達が使っている光村版教科書では、2年上巻54ページで「牛 うし/ギユウ」、6年上巻23ページで「ちち」、下巻29ページで「ニユウ」を習います。ですから、子ども達は2年生から6年生の10月まで「牛にゅう」という妙な表記を強いられることとなります。

漢語を教えなければ子ども達の語彙は増えません。語彙が乏しかったら、複雑な思考はできず、発信能力も受信能力も豊かにはなりません。外国語を習っても受け皿を持たないこととなります。このほうがよほど可哀想です。

「牛乳」と漢字で書いて振り仮名つきで示せば、子ども達も表記全体を目で覚え、しだいに書けるようになるのです。そういう例が、実は同じ教科書に載っています。小三上巻には「給食」「実験」などです。ところがその一方で、31ページに「じょう発」、34ページには「方こう」、38ページには「ろう下」とあるので、基準が分かりません。

ともあれ、作文を清書する段階では、忘れた字は辞書で調べ、漢語は漢字で書くことです。もちろん子どもは大人に尋ねてよいのです。

なお、「物語」「春風」「子供」のように漢字を訓で読むものは漢語ではありませんから、「物がたり」「春かぜ」「子ども」と書いても構いません。

平仮名で書くべき言葉で漢字を使ってしまうのは、形式体言です。「(必ず行く...) こと・もの・とき・ところ・わけ」という場合は、「事・物・時・所・訳」と書きません。接続詞の「また」を「又」と書く例もよく見かけます。但し書きの「なお」も「尚」と書きません。